

## は じ め に

北海道立衛生研究所報第 54 集が刊行されたのでお届けします。

地方衛生研究所の行う事業は、調査研究、試験検査、研修、公衆衛生情報の収集・解析・普及の 4 項目があげられています。調査研究は、北海道企画振興部科学技術振興課の予算による研究、本庁各部の行政問題に応じた研究、そして応募（文部科学省、厚生労働省や民間の予算）による研究に分類できます。平成 15 年度に実施した調査研究は、道費による一般研究課題は 29 課題、同じく重点研究課題は 4 課題、民間等との共同研究課題は 5 課題、国からの受託研究課題は 2 課題、民間などの応募研究課題は 17 課題、外部資金導入課題は 1 課題であり総計 58 課題でありました。本号においては、その中から研究報告として 2 報、調査報告として 4 報、ノートとして 17 報、ほかに資料として 2 報が掲載されました。

近年研究の成果が、社会的貢献度特に製品化・企業化の尺度で評価される傾向にあります。当所の役割からすれば、研究の成果が即座に実社会に応用できる成果を求めて研究目的を立てることは困難な場合があります。特に当所は公衆衛生行政を支える技術的中核としての役割があり、この技術的中核を保つには技術の精度及び改良も重要ですが、不断の科学研究を通して基本の原理原則の追求を行う必要があります。そこから試験検査のための革新的技術が生み出されてきております。当所の 50 年余にわたる実績を見ますと、エキノコックス研究の結果として血清診断法の開発・実用化、「いずし」による食中毒におけるボツリヌス E 型菌の証明と「いずし」製法の改良など、誇るべき業績が多々ありますが、いずれも日常の調査研究の中から生み出された成果が試験検査に応用された結果であります。

一時代前ならできなかった研究が、現在は研究することが可能になったのも時代背景が要請していることであり、当所もそれに対応すべく変革を行っています。

また研究者の育成からすれば、一級の検査技術者に育てるためには経験年数を要し、さらにエキスパートとして研究者レベルに達するには個人の資質のみならず一定期間が必要であります。こうした経歴を踏まえて当所の職員は研究に従事して行くわけですが、そのモチベーションを如何に持続し高めるかは組織のあり方から常に考えて見る必要があります。また日常の試験検査に視点をあて、その中から問題把握を行うことが重要であり、配属されたチームの中で常に検討がなされており、その成果が本所報に結実したと言えます。すなわち調査報告、ノートの多くはその時々の公衆衛生の問題を検討しており、時代の要請を受けた結果とも言えます。さらにこれらの成果を踏まえ積極的に学術雑誌への投稿も鋭意努力し、研究における競争原理を実践しております。

本所報が、多くの方々の目にとまり、ご助言・ご批判を頂ければ幸甚であります。

ともあれ、約 2 カ月間投稿原稿のレベルアップのため査読に全力投球してくれた編集委員の努力には、所員一同多とするところでありますし、また昨年度 1 年間の成果をお届けできることを喜びとしております。